

復活(1865 年～)

長崎での信徒発見

信徒発見のレリーフ(大浦天主堂蔵)

サンタマリア像(大浦天主堂蔵)

プチジャン神父

1854 年、200 年以上の年月を経て、外国人の日本への貿易および来航の禁止が終わりを迎えました。1858 年には、アメリカ・オランダ・イギリス・ロシア・フランスと貿易に関する条約が結ばれ、長崎は自由貿易港の一つとなりました。そして、長崎に外国人に留置が設置されました。日本に定住した数多くの外国人の一人には、フランス人のローマ・カトリックの神父で、1863 年に長崎に居を構えたベルナルド・タデー・プティジャンがいました。長崎で彼は、大浦天主堂の建築に貢献をしました。当初、天主堂は、フランス人のカトリック教徒に利用されていましたが、南蛮寺を見たいという好奇心旺盛な少数の日本人が訪れることもありました。天主堂が 1865 年に完成して間もなくして、キリシタンである浦上の村民が訪れ、プチジャンに自身がキリシタンであることを告白しました。

村民は宣教師たちの存在に力をもらい、仏教の葬式の慣例に従うことを拒否するなど、自分たちの信仰に確信を深めてきました。それとともにまだ禁教下の中、彼らへの迫害も増えていきました。浦上に置ける大きな迫害のうちの一つは、結果的に 3394 人の日本人キリスト教徒を流罪に処しました。西洋諸国からの非難によって、1873 年に、ようやくキリスト教への禁止令は撤廃され迫害も終わりを告げました。禁止令の撤廃ののち、多くの隠れキリシタンたちは、カトリック教会での信仰を再び始めましたが。その一方で、先祖から受け継がれて来た伝統を引き続き信仰する人々もいました。